

当会会長就任に際してのご挨拶

澤 俊行

本年5月26日開催の本協会社員総会において本協会の会長を拝命致した澤です。椿前会長から日本学術会議の「協力学術団体」の称号を授与されるようにと御下命を頂きました。勿論本協会の地道な研究はじめ多くの分野での活動を並行して行い、成果を確実に積み上げることと本協会の発展のために活動することがミッションだと考えており、本協会役員及び会員皆様と共に協会の発展を目指したいと考えております。

2011年より研究委員会の委員長として活動し、さらに椿前会長の下で副会長、及び総務委員会委員長と表彰委員会委員長も務めさせていただきました。本会定款第4条(1)「学術研究・調査・試験及び新技術の開発並びに研究成果の刊行・普及」と述べられているように、学術研究を行い成果も刊行することが必要と思われ、そのための組織も必要と思います。すなわち他の学会及び技術（研究）協会等で普通に行われている論文集のような成果をまとめることが今後の「ねじ」分野の技術の集積と発展には重要だと思われまます。他方大学は2004年の国立大学の独立法人化から研究業績評価をより厳密に行う方向のようで、学協会が発行する論文のオーソライズ化のために2005年から日本学術会議が「協力学術研究団体」の称号を授与するようになりました。同時にこの称号を取得できると協会の社会的信用が向上すると言われております。2006年頃ある協会の事務局長が、称号取得ができ「これで当協会の論文集に掲載された論文は学位論文提出時に論文として認められる」と喜んで言われていたことを思い出します。当時はそのような小さい協会の論文集に投稿など考えたことはなかったのですが、ある機会に投稿を勧められたことと、学生に海外で英語論文を発表させる前段階で、日本語の論文としてまとめさせることも意味があると考え、投稿させました。その結果、論文が掲載され、同時にその年度末にその論文に対して賞を頂きました。その協会の総会で表彰され、懇親会にも誘われいい気分大学へ戻ってきました。大学の卒論、修士及び博士課程での研究が重要であり、発表する場があることも大事であると思われまます。現在新型コロナウイルスの影響で対面でのシンポジウム開催は困難ですが、WEBによりねじに関するシンポジウムも継続開催をしており、会員への情報公開と会員同士の情報交換の場になるものと推測しております。

他方、国内の研究状況も大きく変わり、大学も独立法人化後は、通常の研究費用が減少し外部資金獲得が日常業務になりつつあるようです。そんな中でも必ず研究成果が必要であり、人財をつくる大学では知識供与と同時に問題解決能力開発のための研究を行います。その結果を公表して、多くのコメントに接しながら問題解決能力を極めることも大事であると思われまます。そういう観点から本協会が協力学術研究団体の称号を取得し、論文集などに掲載される論文が公に論文として認められることが必要であり、必ず成果が会員に還

元されるものと確信しています。ただし、この称号取得のためには以下の4つの条件をクリアすることが必要です。1) 学術研究の向上発達を主たる目的として、その達成のための学術研究活動を行っていること、2) は個人会員が100名以上必要、3) は論文集(研究成果)を継続して発刊していること(以前は3年連続して発刊していることが条件)、4) は協会が研究者の自主的運営によっていること及び研究者が個人会員の半数以上必要、が条件です。研究者の定義は、1. 大学、高等専門学校、大学共同利用機関等において研究に従事する者、2. 国立試験研究機関、特殊法人、独立行政法人等において研究に従事する者、3. 地方公共団体の試験研究機関等において研究に従事する者、4. 公益財団法人、公益社団法人、一般財団法人、一般社団法人等において研究に従事する者、5. 民間企業において研究に従事する者、6. その他、当該研究分野について、学術論文、学術図書、研究成果による特許等の研究業績を有する者、となっております。

現在本協会の個人会員は45名(2022年3月現在)で、さらに最低55名の新規個人会員数が必要です。二つ目の論文集の発刊計画は現在進めており、これは何とかクリアできそうです。会員の皆様にはお願いですが、企業の方で個人会員になって頂ける方をお誘いして頂き、上述の個人会員100名以上を是非突破したいと考えております。よろしくご協力のほどお願い申し上げます。